325
185

始

36.12.26

21150
325-185

進呈

山上の垂訓研究

大阪基督教青年會主事
ジョーヂ・グリーソン著

日本基督教青年同盟出版

日本基督教青年同盟寄贈本

大正
2. 8. 1
寄贈

神の品性、性質、習慣及び計劃を熟思すれば熟思するほど、神の窮りなきを我は見出す

ジョン・アール・モット

我等が同胞並に自己の益を圖るために力を用ゐるに當り、その成功すると否とは、主として我等の日常生活がかの新約聖書に示されたる大なる倫理主義に順ずるや否やに在り。

セオドール・ローズベルト

目次

序……一
聖書研究指導者への助言……一
緒論……一
第一課　序論……三
第二課　神國民か有すべき四個の個人道德……九
第三課　神國民か有すべき四個の社會道德……二一
第四課　神國民の感化……三五
第五課　過去に對するイエスの態度……四一
第六課　神國の五個の新道德規範……四八
第七課　神國民の動機……七〇

序

此の山上垂訓の研究は、耶蘇基督の教訓に關する三課程中の一つである。『耶蘇基督の譬へ話』及び『基督の八大主題の教訓研究』はこれと並立する課程である。此等の三課程を綿密に研究するならば、誰でも耶蘇の教訓に關しては全く完全な知識を有つに違ひない。著者の望む處は、耶蘇の言説を學び終つた人が尙ほ進んで、彼の行爲を知らんが爲めに彼の傳記を研究せむことである。

此書中に聖書の文句を引照したのは、特別に聖書を

目次

第八課　神國民に對する警告……九〇
第九課　祈禱……九九
第十課　品性の基礎……一一七
第十一課　復習及び結論……一二三

聖書研究指導者への助言

聖書研究指導者諸君への一般的な手引として『イエス、キリストの譬話の栞』と云ふ本を薦めたい。此書は日課にあてはまる樣に排列されてもなく、又一授業時間に一章つゞ敎へられるやうに分けてもない。或箇所は二三授業時間を要する。それ故に指導者は自分の組に適するやうに材料を分けなくてはならぬ。聖書指導者たる者に缺く可らざる、又其の一部分などは熟讀研究して自家藥籠中のものとしなくてはならぬ處の本がある。それはキング博士著"The Ethics of Jesus"『イエスの倫理』である。その第五、六、七、及び八章は實に山上の垂訓の簡潔なる註釋としては英語で書かれたものゝ內最も優越なるものである。此書は日本語にも飜譯された。(『イエスの倫理』加藤直士譯、警醒社發行、定價壹圓)。此題目に

讀まんと欲する人々の爲めであるから、簡單に研究しやうと望む人には必要はない。

引用聖書は米國改譯である。

著者は、有益な助言を與へまた種々の材料を給せられた友人等に感謝したい。

千九百十三年一月

日本大阪に於て

ジョーヂ・グリーソン

關した論文で最も完全なのはゲオトーの『山上の垂訓』である、これは「ヘスティング聖書辭典」第五卷に出てゐて四十頁程ある、其他の參考書は

Gore: "The Sermon on the Mount"

McAfee: "The Studies in the Sermons on the Mount"

Tolstoi: "My Religion"

"The Literary Interpretation of the Sermons on the Mount"

(これはドッグ、テンニイ、モフアット三氏の講演を集めたものである)

教へるに當り、聖書指導者は皆聖書の書かれたる目的を心に留め、人々を神に親しむやうに導びき、彼等の心に基督に似たる性格を養成せしめ而して奉仕の生活をなす樣鼓吹せねばならぬ。

緒論

イエスが山上の垂訓を宣べられたのは、その公に傳道を始めてから一年半の後のことで、凡そ紀元二十八年の夏であつた。其頃イエスは澤山弟子を有つて居られたが、其内から十二使徒を擇ばれた。(馬可三〇一三—一九)彼の事業は新しき宗教運動の形式を取りつゝあつた。夫れ故に今や、此新しき教師の弟子は此運動に加はる處の人々が必ず遵守すべき數々の根本教理を明確に領解せねばならなかつた。これすなはち此の垂訓の因つて成されたる理由である。

此垂訓の言辭は難解である、而して恐らくは未だ嘗て完全には領解されてあるまい。これイエスがその思想を一般普遍的に當てはまるやうな風に言表されたからである。ゲオトーが云ふやうに『此垂訓に於ける

イエスの言辭は、宗教的眞理及び倫理的教理に基ける人生の一の理想を表はしたものであつて、この理想たるや昔も今も、比類のない、人生最高の基礎として直觀的に認識されるものである。」であるから、此の品性と行爲との普遍的理想が十九世紀間無類のものとして傳つて來たから、之を書き表はした言葉も自づから最も周到な研究を要すべきものであることは當然のことである。

此垂訓の記錄は如何にして傳はつたか。

イエス自身は書物も論文も書かれなかつた。長年彼の弟子達は、彼の教訓若くば行爲を記錄したものを有たなかつた。併しイエスが紀元二十八年に宣べられた此垂訓は約四十年若くば五十年の後、即ち紀元七十年と八十年の間に馬太によつて書かれた。その長い年月の間イエス

の諸教訓は口傳へにされてゐた。併し紀元五十年頃、イエスの話した言語たるアラマイック語で書かれたやうである。パウロ及び其同伴者に依り、福音が希臘人に傳へられた時には、彼の說教もアラマイック語の記錄も段々と記錄され或は翻譯されて澤山斷片的な希臘語の文書が出來たとは云へ、第一世紀の後半に於て此等斷片的の文書は四福音書に纏められ、これ遂にイエスの傳道の基本的記錄と認められた。これらの福音書は希臘で書かれ、又イエスの死後三十年から七十年頃までの間に書かれてある。しかもイエスはアラマイック語で話されたのであるから、彼の言葉その儘のものは殆んど遺つてゐない。併し乍らその遺つてゐる丈けのものを以てしても、彼がその三年間の公生活中にその時代の人々に驚くべき印象を與へたと云ふ事實は明かである。今日と雖も聖書は世界に於て最も多く賣れる本である。千九百十年に於ては百九十

萬部と云ふ多數の聖書が印刷され頒布された。而して聖書は四百二十四の國語或は方言に翻譯されたのである。

山上の垂訓の研究

此山上の垂訓を研究することは、やがて、イエスが建設せんとして來られた社會の主義、規則を研究することである。此社會、團體或は教會を呼んで、イエスは神の王國、天國と云はれた。若し吾等が此の王國とは此地上に於て、イエスに教へられたる規則に從ひ教理を守る處の男、女、子供等に依つて組織されるものだと云ふやうに考へるならば、イエスの教を最もよく了解することが出來るのである。諸君が此研究に着手するのは、取も直さず一大世界的なる萬國組合に加入せんとするのである。而して諸君は方にその組合の憲法及び法律を研究せんとして居る、また諸君は若しその主義規則を是認するならば、終身組合員として加

入するであらう、とから自ら思はれるがよい。

イエスの萬國組合は人種とか、容貌とか、階級境遇などの限界がないのである。これは西洋的でもなければ東洋的でもない。尤も西部亞細亞に發生したのであるから其の本源地は東洋ではあるが、此組合の成長は遲々たるものであつた。何となればその創設者の目ざすところは、神の生活に關からんよりは、寧ろ自己の動物性を保存せんと欲する者の多い人間の中から、神の子を作るにあるからである。併し乍ら組合員は增加しつゝある。最も信ずるに足る記錄の示すところによれば、歐米人の約半數はすでに此組合に加入したとの事である。而して會員は世界の殆んどあらゆる國民あらゆる種族の間に見出されるのである。

『彼の王國は永遠に廢たることなく、而して彼の權力は代より代に至る』

（舊約聖書）

第一課

第一　總論（馬太五章一、二同七章二八、二九。）

馬太傳五章一節、イエス許多の人を見て山に登り坐し給ひければ弟子等も其のもとに來れり。

二節、イエス口を啓きて彼等に敎へ曰けるは。

同七章二八節、イエス此等の言を語竟たまへるとき集りたる人々その敎を駭きあへり。

二九節、そは學者の如くならず權威を有てる者の如く敎へ給へば也。

（一）垂訓の宣べられた場所

第一節に書かれてある山と云ふのは確かに北部パレスチナの內にある或る小山のことで。それはガリラヤ湖の西岸の住民多きガリラヤ州にある。イエスは此地方で最も多く傳道された、そしてその十二使徒

も一人を除く外は皆な此地方から出たのである。

第二　その聽衆

(一)第一節、聽衆はどんな人々であつたか。

(二)群衆がイエスに從つて來た時に、その中には好奇心で來たもの、或は物質的の利得の爲めに來た者、或はまた眞に彼は神からの使命を有つて居るのか如何かを眞劍に知りたいと思つて來た者もあつたが、彼はその群衆の中から眞摯なる弟子若くは求道者と云ふやうな者を山上に招び集めたのである。かう云ふ風に彼は熱心に耳を傾ける聽衆を擇り出した。

第三　說敎者

(一)公けの敎師となる以前のイエスの職業は何であつたか。(馬太一三章五四、五五馬可六章一―三)

(二)イエスは三十歳のとき、その大工の職を捨てて巡廻傳道師となり病人を癒す者となつた。彼は此山上の垂訓を宣べる前、一年半の間、その驚くべき行爲と言葉とに依つて此國中に知れ渡つてゐた。

(三)イエスの名の知れ渡つてゐた事に就ては馬太四章二三―二五を參照せよ(路加四章一四、一五、馬可二章一二)

(四)イエスは如何なる態度で敎へたか(第一節)

第四　此垂訓の與へた印象(二八節及び二九節)

(一)此垂訓は群衆に如何なる印象を與へたか。

(二)何故に。

(三)二九節にあげてある學者と云ふのは舊約聖書の敎師である。彼等はその敎へには自分等獨創の考は入れなかつた。彼等は只單に他の人に敎へられた丈けのものと、自分等が舊約聖書を讀んで得たものを繰

返したに過ぎなかつた。

第五 イエスの教訓に對する諸家の批評

(一)山上の垂訓はそれ自らでイエスの全教理中のあらゆる最深義と精髄との總計のやうなものである。(キング博士)

(二)若し我等がイエスの教に關して疑を挿むやうな恐があるときは、我等は幾度も幾度も、山上の垂訓(馬太五章三―一二)の祝福に霑はねばならぬ。その祝福はイエスの倫理も宗教も包括し、その根柢に於て一つに統一され、而して外面的な個々の要素に煩はされてないのである。

(三)イエスの獨創力は彼が零碎斷片のうちに眞實にして永遠なるものを認め、且つ之を極力宣揚したることに基くものである。(ウェルハウゼン)

(四)イエスは世界の到達點として、萬人は凡て神の子供であり、四海同

胞であることを識認すべき文明―すなはち愛人の文明を確固と打建てたのである。(キング博士)

(五)イエスの教義は人々の生活を統率し、以て彼等の共同生活を如何に營むべきかを教へるのが目的である。(トルストイ)

(六)山上の垂訓は、イエスが建設せん爲めに來つた王國の國民たるには、人々はかくあらねばならぬ、かく爲さねばならぬと云ふ事に關するイエスの思想を公表したものである。(ヴォトー)

(七)イエスの教訓の有効なる所以は、その能力、權威等すべて人の支配者たる資格を具ふるがためである―彼は學者等のやうに證明せず、論議せず、また威嚇もしなかつた。彼は人格的の力により群衆を順へたのである。(ピーボデー教授)

(八)基督教は我々に個人として如何に死すべきかを教へたのみなら

ず、尙ほ社會の一員として如何に生くべきかを敎へたのである。（ベンジャミン・キッド）

第六 垂訓の內容

『第二課』に入る前に、諸君は內容の表に立返つて見て以下の九課目によく注意し、なほ次に來るものは何であるかを想はれたい。

第二課　神の國民の有すべき四個の個人道德

三節、心の貧しき者は福なり、天國は即ち其人の有なればなり。
四節、哀む者は福なり、其人は安慰を得べければなり。
五節、柔和なるものは福なり、其人は地を嗣ぐことを得べければなり。
六節、饑渴くごとく義を慕ふ者は福なり、其人は飽くことを得べければなり。

第一 垂訓の第一語

(一) 此垂訓は如何なる言葉を以て始められたか。
(二) 此言葉は、三節から六節までの間に幾度使はれたか。
(三) 「福なり」と云ふ希臘の原語は、正義の思想と正義の行爲との當然の報たる、眞の平安の狀態を表すもの、即ち人と神との調和を言ひ表すも

のである。此「福なる」人は平安と喜悅とを有ち、幸福なものである、而して其人は自分の現在及び未來の幸運が保證されてをることを感ずるのである。

第二　第一の個人道德とその報賞

(一)第一の個人道德とは何であるか。

(二)「心の貧しき」と云ふ意義如何。

(イ)「心の貧しき者」とは謙遜な者、虛心坦懷な者である。此等の人々は傲慢と虛僞と自慢心と片意地とに滿ちた處の人々と反對である。此謙遜にして虛心なる性質は、一層善いものに發達することの第一要件である。これは學問の王國に入るにも神の王國に入るにもその戸口である。(キング)

(ロ)これを解釋して、貧乏を稱讃したものだとするのはイエスの眞

意を誤解するものである。イエスは所謂富貴と云ふものを稱讃したことは無いと共に、貧乏をも稱讃はしなかつた。『彼の要求した處のものは、精神生活の卓越と、それから物質的のものを正しく用ゐると云ふことであつた』(ヴォトー)

(ハ)善良なる人は常に學ぶ人である。(ジェ・ジー・ホラード)

(三)「心の貧しき」者は如何なる報を得るか。

(四)天國の意義

(イ)天國と云ふ言葉はイスラエルの信仰篤き人々の諸種の憧憬を約述したものである。イエスはその弟子等に、すべて求むるものは得られるのだと語る(ヴォトー)

(ロ)假りにイエスが近代の聽衆に說敎するとしたら、かう言ふであらう『私の團體の團員としては謙遜な者、虛心坦懷な者を歡迎する。左

様な人々からは善事は一つたりとも拒まるものでない。左様な人々は、人若くば神の與へ得る最善のものを必ず得る。彼等はあくまでも上達し、進歩するの見込がある、而して彼等は必ず幸福と平安とを獲ることが出來る』

第三 第二の個人道徳とその報賞

(一)第二の個人道徳とは何か。

(二)「哀む者」の意義如何

(イ)イエスの謂ふ處の「哀む者」とは、自分の罪の爲めに悲しむ者、自分の弱點を自覺する者、また心から悔悟する者を指すのである。悔恨は深刻な良心の鋭さを含むのである。このやうな悔恨の缺けてゐるところには品性の向上はあり得ない。(キング)

(ロ)若し「心の貧しき」と云ふことが凡て善なるものに對して虚心坦

懐なるを意味するならば、「哀む」ことは、その生活と品性から悪を逐ひ出さんと斷へず力爭することになる。前者は積極的の德で、後者は消極的の德である。前者は斷へず取り入れることであり、後者は取り去ることである。善を受ける力と悪を拒絶する力とは同樣に重要な德である。

(三)「哀む人」はどんな幸福なる報を受けるか。

(四)「安慰(なぐさめ)を得べし」と云ふ意味

(イ)安慰と云ふ言葉はヘブライ文學には普通なものである。偉大なる説教者イザヤは基督より七百年以前に説いて居る。『主エホバの靈われに臨めり、こはエホバわれに膏(あぶら)をそゝぎて貧しき者に福音をのべ傳ふることをゆだねわれをつかはして心の傷(いた)める者をいやし、すべて哀むものに慰安を與へ給ふ』(以賽亞六一章一、二)

イエスの言葉はこゝて此イスラエル民族の諸希望と一致する。

(ロ)悔恨する者のみが、遂にはそのあがき求めてゐる理想の人格に、間違ひなく達すると云ふ確證を得るから、眞實に慰安を受けるのである。鋭どい良心は、人生に於ける最も美しい喜を受けるに缺くべからざる條件である。(キング)

(ハ)缺乏を感じたことのない子供は深い歡喜を味ふこともない。(バルマー)

(ニ)人々が神に對し從順であるところの新しき地の幻像(默示錄二十一章一—四)

第四　第三の個人道德とその報賞

(一)第三の個人道德とは何であるか。

(二)「柔和」の意義

(イ)柔和であるとは、大人しく寛容で、自制力あることの謂である。

(ロ)柔和な人はその個性をも、また品位をも失ひはしない。徹頭徹尾自分を神に從屬せしむることに依つて、人間はその個性をも實力をも強め、而して益々世界に感化を廣くするやうになる。

(ハ)柔和は決してお手輕に出來る德ではない。柔和は最も強き克己であつて、剛健な人にとつては根本要素である。柔和な人々はその有つべき權利を強ゐることなく、却つて自ら克己し、努力し、忍耐する。(キング)

(ニ)柔和は、復仇を欲する本能性を抑制する者の精神である。(フィンドレー)

(三)柔和なる人は如何に幸ひな報賞を得るか。

(四)「地を嗣ぐ」と云ふことの意味

(イ)柔和にして克己力ある人々は反抗する敵を作らないから、他の人々を制御する能力を有ち、かくして自分の計劃を遂行することが出來るのである。上述の如き性格の人は益々感化を及ぼし成功を博するやうになる。

(ロ)子供のやうに柔和な心を有たずして、險しい山に鐵道を布くとか、大航海を成し遂げるとか、或は地中から鑛物を探堀し得た人はないのである。自分が依つて以て生活せねばならぬところの、境遇の諸法則を欣々然として學び、且つ此等の法則を固守するやうな精神こそは常に最善のものを嗣ぐにふさはしいのである。(マカフィ)

(ハ)柔和なる人には、現在生活から最大恩寵を得べき約束がある。即ち柔和は人生の最大享樂へ通ずる一王道である。柔和な人は斷へず輕んぜられ、蔑まれると云ふ感情を脱する。それ故に傲慢な人ならば

ひたすらに慘じめさを感ずる場合でも、柔和な人は滿足を感じ愉快を感ずる。柔和な人は他人の喜を共に喜ぶ事が出來る。それで眞實にあらゆる喜を味ふのである。己を支配する者は凡てを支配する。自己を常に制御する人は、斷へず、一段低きものを一段高きものゝ爲めに、一時的のものを永久的のものの爲めに犧牲にする。人生の最善事は常に此克己の人の爲めに存在する。確かに柔和な人は地を嗣くのである。彼等は現在に於て最も多く人生より得る處がある。(キング)

第五　第四の個人道徳とその報賞

(一)第四の個人道徳とは何であるか

(二)「饑え渇くごとく義を慕ふ」と云ふ意味

(イ)義とは、神が人間に向つて要求する品性及び行爲の謂ひである。義しい人は神に對しても人に對しても正しい關係を保つ者である。

(ロ)饑ゑ渇く如く義を慕ふとは、品性の爲めに飽くことなく、強烈な止むことなき欲求である。これは品性の爲めの戰鬪に於て熱心己れを蝕ふことである。

(三)饑ゑ渇く如く義を慕ふ者は如何に幸福なる賞を受けるか

(四)「飽く」と云ふ意味

(イ)神と人とに對し正しい關係に於て生活せんと熱心に欲求するところの人は、必ず幸福な經驗に滿された生活をすることが出來る。

(ロ)剛健なる意志を以て品性の爲めに奮鬪する者は、必ず神の品性と生活とを分與せらるゝものである。

第六　四ヶの個人的道德の論理的順序

一　イエスの與へた順序

(一)虛心坦懷にして善をなすを喜ぶこと

(二)純粹なる悔恨、惡を遠かること

(三)積極的自制力

(四)高き品性を追求するに熱心なること

二　これは論理的順序であるか

(イ)虛心坦懷が第一要素たるは言ふ迄もない。これは發達し得る爲めの必要條件である。かゝる精神は自ら悔悟に到達するものにして、眞の悔悟は謙遜を含む。それ故に、忍耐の出來ぬやうな場合に忍耐し遂すところの人の柔和自制は、その主要なる幇助として、謙遜なる心、悔悟せる精神を要するのである。自分の缺點を最も好く知るところの人は、最もよく他人を寛容するのである。此最極度の自制心は心意を盡して義を慕ふことの先導となるのである。再び繰返すが、最高なる品性を追求するに熱心なることは、謙遜と悔悟と自制心とを含有

するのである。(キング)

(ロ)イエスの弟子たる者が目指すところの四ヶの個人道德は、イエスが示されたやうな順序で琢磨せねばならぬ。

第一　教を受くる習慣

第二　自分の心と生活とより惡を驅逐する習慣

第三　自制克己の習慣

第四　思想行爲に於て高き品性を欲求する事

第七　各自の問題

(一)自分は此等の四德をどの位ゐ養成してをるか

(二)イエスが此等四德を得有した人々に約束されたところの悅と平和とを自分は有つてゐるか

第三課　神國民たる者の有すべき四ヶの社會道德(馬太五章七―一二)

七節、矜恤(あはれみ)あるものは福(さいはい)なり、其人は矜恤を得べければなり。

八節、心の清きものは福なり、其人は神を見ることを得べければなり。

九節、和平(やはらぎ)を求むる者は福なり、其人は神の子と稱へらるべければなり。

十節、義(ただしき)ことの爲めに責めらるゝ者は福なり、天國は即ち其人の有(もの)なればなり。

十一節、我がために人なんぢらを詐(そし)り、また迫(せ)害め、いつはりて各樣(さまざま)の惡言(あしきこと)をいはん其時は爾曹(なんぢら)福なり。

十二節、喜び樂め天に於て爾曹の報賞(むくひ)おほければなり、そは爾曹より前(まへ)の預言者をもかくせめたり。

(一)前に研究した四つの徳とは何であつたか

(二)それら四つの徳は主として個人的のものであつた。それ等の徳は我等の對他人的關係には餘り觸れてゐない。今論ぜんとする四つの徳は、社會に於て他人と相對關係を有つ處の人としてのみ實行し得るものである。それで此四つは社會道徳と呼ばれる。

第二　第一の社會道徳とその報賞

(一)第一の社會道徳とは何であるか。(七節參照。)

(二)「矜恤ある」と云ふ意味

(イ)矜恤とは凡ての人を愛し且つ赦すことを要求するものにして、人を恨み、人を仇とするものでない。更に積極的の意味で云へば、矜恤は人に對し深き同情をもち、之を實際の奉仕に表はし如何なる人にも同情を表することを要求するものである。(ヴォトー)

(ロ)矜恤ある者は慈悲深く同情深い。矜恤は單に憐憫や禮讓だけではない、尚ほ積極的な親切を含有するのである。これは單に外面上の待遇の仕方に止るのでない、人の精神に對して慈悲深いことである。すべて人と人との接觸はこの矜恤を叫び求めてをる。(キング)

(三)矜恤ある者は如何なる幸福な報賞を受けるか

(四)「矜恤を得る」と云ふ意味

(イ)他人に對して常に同情あり親切であれば、他人よりまた同情と親切とを受ける。

(ロ)人は稱讃されたり、羨まれたり、敬服されたり、また畏敬されたりする。けれど若し矜恤のない人ならば、利己的の結果恐ろしい寂寥の裡に捨てられて了ふであらう。利巧な、利己的な、片意地な、小策を弄する人には最も善い友情の賜物を受けることは不可能である。併し乍

ら常に他人の生活に對して眞に同情を有つところの人は遂には唯一人捨てられることはないのである。(キング)

(ハ)『氣尙かれ！さすれば、他人の内に死ぬることなく、たゞ眠りある尙き心は汝が心に會はんとて、おごそかに起ち去るべし。しかせば汝は尙き心の輝を、數多き人々の眼に見るべし しかせば清き光は、汝の行く途に注がれて汝は最早悲しからず、また孤獨ならじ。』(讀人知らず)

第三　第二の社會道德とその報賞

(一)第二の社會道德とは何であるか

(二)「心の清き」と云ふ意味

(イ)心は、「一切の感情思想行爲を發生するところの内面的、中心的自

我」である。心に於て清くなることは、人間生活の源に於て清くなることである。

(ロ)キング博士は、此第八節は大部分の學者に依ては十分に了解されてないと云つてゐる。心の清きことは單に個人道德である計りでなくまた社會的道德である。心を清く保つ處の動機として、個人の神聖なることを尊重する。『心の清き者は各人の靈の内に神の子を發見するのであるから、從つて人を一つの物として取扱ふのでなく、聖なる人格として取扱ふ。』とキング博士は書いてゐる。これ即ち社會的清潔の第一歩である。各個人を神の子として尊敬する人々に依つては決して社會的惡は傳播されない。

(ハ)通俗にすることは不清潔にする道である。敬虔の失せた時には清潔もない。敬虔は清潔の生長する根である。(ポーイス、スミス)

(三)「心の清き者」は如何に幸なる報賞を受けるか

(四)「神を見る」と云ふ意味

(イ)心の清き者は人間の内に神を見るのである。他の人格を尊敬すれば人の内に住む處の神の像影を見ることが出來、神の爲しつゝあることを見ることが出來、かくして神の趣味と喜悅とを經驗することが出來る。

(ロ)凡て敬虔の念は本來同樣なものである。蓋し人々の内に神を見、神を認識することは、やがて自分の内に神を見る力を自然に受くべきである。それ故に心の清き者は神を見る。而して神の生活の實を見た者は、盡きざる喜悅の源を有つのである。(キング)

(ハ)神の像影を見ることはあらゆる聖者の志望であつたのだ。その條件は極めて單純である。唯清潔なれ、他人の個性と人格とを敬愛し

長敬せよ、而して各人を神の子として待遇せよ。

第四　第三の社會道德とその報賞

(一)第三の社會道德とは何であるか

(二)「和平を求むる者」と云ふ意味

(イ)平和を作る者は平和を保つ者以上である。平和を作る人は、その同胞の間に和解者となり、衆人の間に積極的に平和を進め、衆人を統一せしめて神の行を爲すと云ふやうな、高級な人々に屬する者である。此種の人々は、つぶやく者、ですぎ者、告げ口する者、世話ずき、お喋舌、または惡戲屋とは反對の者である。(キング)

(ロ)ビショップ、バシュフォードは云つた、此處に用ゐてある、平和を求める者と云ふのは、啻に人々の間に平和を作るものでなく、神と人との間に平和を作るものである。自分の友達を神に連れて行つて、そ

の人々の心に平和を生ぜしめるは、最も大なる平和の作り人である、すなはち神の子供である。

(三)「平和を求める者」は如何に幸なる報賞を受けるか

(四)「神の子と稱へらるべし」と云ふ意味

(イ)衆人の間に平和を作ることは神自身の眞の働である。此の働に關さはる者は「受くる者よりも與ふる者は幸福なり」との悅と神と共に享有することが出來るのである。かくの如き人々は、子供として父の事業と、父の悅とに加はるのである。而して彼等の悅は更に增加へられる。即ち衆人は次第々々に自己の靈を認め、自ら神の子と呼ぶの悅を受くるのである。此無私的な平和を求める人の生活は、永久に誤解されることはないのである。(キング)

(ロ)今日は此種の社會道德は甚だ必要である。戰爭の爲めの兵器や

準備などの恐ろしき重荷は速かに輕くされなくてはならぬ。私等は國際的の不信とか衝突とかの諸原因を一掃したい。併し乍ら私等は平和の作り人として成功する前に先づ、イエスに依つて宣べられた以上の六つの德を有してゐるか否かを自ら檢べなくてはならぬ。(馬太七章三、五)

(五)何時我々は平和の作り人となり始め得るか。

第五　第四の社會道德とその報賞(十節—十二節)

(一)第四の社會道德とは何であるか

(二)「義しきことの爲めに責められる」と意ふ意味

(イ)此等の個人道德及び社會道德の極まる處は犧牲である。イエスの弟子等の作れる社會に加はる資格ある者は、誰でも喜で衆人の間に正義と眞理とを宣傳せん爲に困難を忍ばねばならぬ。誤解されて

も開拓者たるの試練に面接してはならぬ。不人望と云ふ危險を冒し、而て犧牲と苦痛の中に見出される確實なる愛の證明を與へねばならぬのである。イエス生活の絶頂は運命の歸趨を示せる事例で有た。

(ロ)イエスは餘りに衆人を愛したので、誰かすことは出來なかつた。快樂の探求者やまた人生の表面だけに生活する者には眞の幸福は來らないことをイエスはよく識つてゐた。最深の幸福は、或る高い目的の爲めに義俠的奉仕を爲し遂した者にのみ來るのである。

(ハ)私等は、實に自分に對すると同樣に他の人々に對して、廣き考と深き同情とを有つことに依つてのみ、かの偉人の場合と同じ樣な、最高幸福を享有し得るのである。かくの如き幸福は屢々大なる苦痛を伴ふのであるから、之を單なる苦痛と區別することの出來るのは、此幸福たるや如何なる物を措いても選び得るべきものであるから

である。(ジョーヂ・エリオット)

(三)責めらるゝ者は如何なる幸福な報賞を得るか

(四)「天國は即ち其人の有なり」と云ふ意味

(イ)天國は謙遜にして坦懷なる人(三節)及犧牲になる人(十節)に約束されたことを注意せよ。第一と第八との德に對しての報賞は同一のもので、之イエスの與へ能ふ最高のものである。イエスは次のやうな言葉を以て此等の德と報賞とに關する話を終つたで有う、『現世と末世に於て自分の力で與へ得る一切はすべて、他人の爲めに犧牲になつて、その愛の生活を成し遂げる人の上に加へらる可きものである』

(五)何時私等は犧牲の生活を始めべきか、

第六　社會道德の順序

一　イエスが與へた順序

(一)衆人に同情すること(七節)
(二)衆人の人格を尊敬すること(八節)
(三)衆人と和らぐこと(九節)
(四)衆人の爲に犧牲たること(十節—十二節)

二これは論理的順序であるか

善を受容するか、悪を排扼するか、自制及び品性の爲めの努力と云ふ四つの個人道德は、一段高き社會關係に導びく準備である。眞實にして親密なる社會生活の第一條件は同情である。人をして其友人等の內面的思想、希望に密接せしめる同情である。かくの如き同情は他人の人格に對して尊敬愛敬となり、遂には淸き個人生活、社會生活に進むのである。而して他の人々に對する尊敬は發展して其人々の平安なる生活を欲求するやうになる。最後に、此平和を擴めんとする欲求は人をして喜

んで他人の爲めに苦痛と迫害とに面接せしめるに至る。此論理的順序はイエスの言葉の精確な記錄にある如く、最も信據すべき確證の一つである。

第七　結論

(一)キング博士が云つたやうに、イエスは各人を助けて『その當然在るべき處のものたらしめ、その出來るだけのものを享有せしめ、而してその力に應じて勢力を得せしめる、即ち高き品性と幸福と感化力とを得せしめる』やうにするのである。品性と幸福と感化力の發達に於ては、以上吾々が研究したやうに、イエスは僅少の言葉を以て八階段に分けて說明した。すなはち謙遜なる虛心坦懷に始まつて、勇氣ある自己犧牲の絕頂に至るのである。この八つの德は人氣のよい德ではない。千九百年の後に於てすら此等の德を有つ者は殆ど無いのである。併しながらイ

エスの言はれたやうに、此等の徳を琢磨して、品性と幸福と感化力とを得ん爲に奮闘する人こそは、イエスが建設せん爲めに來つた愛他的文明を擴張する處の指導者である。

(二)何人と雖も私等からこの幸福の八つの源の一つをだに取去ることは出來ない。私等の敵の働すらも私等に喜を增し加ふるのみである(十一—節十二節)イエスの與へる喜は獨立不羈のものである。(ヤコブ一章二—四)

(三)諸君は此等八つの徳を殘らず琢磨する爲に着實に努力せんとするか、而して何處に之を始むべきか。

第四課　神國民の感化(馬太五章十三—十六)

十三節、爾曹は地の鹽なり、鹽もし其味を失はゞ何を以てか故の味に復さん、後は用なし外に棄てられて人に踐るゝ而已。

十四節、爾曹は世の光あり、山の上に建られたる城は隱るゝことを得ず。

十五節、燈を燃して斗の下におく者なし、燭臺に置きて家にあるすべての物を照さん。

十六節、此の如く人々の前に爾曹の光を輝かせ、然せば人々なんぢらの善き行を見て天に在ます爾曹の父を榮むべし。

第一　緒論

イエスの目的は衆人の品性、幸福、感化力を開發させるにあつた。此の目的の爲めにイエスは其説教の初めに自分の弟子たる者が琢磨すべき八ケの徳を説き明したのである。彼は次に一歩を進めて、自分の弟子

たる者は世界に對して如何なる感化を及ぼすべきかを說いた。

第二　鹽(十三節)

(一)　鹽は何の用になるか

(二)　イエスに敎へられたる八德を琢磨する處の人々は如何にして社會の鹽となるか。

(三)　上述の質問の答案の參考

(イ)　鹽は食物に味をつけ、食物を貯へる爲め、或は化學的作用をなすために用ゐられる。鹽は世界到る處に存在し、而してあらゆる國民に使用される。

(ロ)　イエスに敎へられた德を有する人々は、社會に道德的の味をつけなくてはならぬ。社會を不道的な頽廢に陷らぬやう保存しなくてはならぬ。またすべて善良なる社會制度を設立するに指導者とならなくてはならぬ。

(ハ)　私等の周圍にある多數の人及び社會が不道德の爲めに廢滅しつゝある源を注意し、且つ如何にイエスの弟子等が此頽敗を防止するかを考へよ。

(ニ)　若しイエスが、今日日本に居たとしたら次の如く言ふであらう『わが眞の弟子は此帝國の偉大なる濟生會であらねばならぬ』と。

(四)　十三節後半の意味

純粹な鹽が、若しその味を失つた場合は全くすたれたものである。併しユダヤ人の用ゐた鹽の混合物は、鹽の溶け去つた後にも何か不潔物が殘つてあつた。イエスは自分の弟子の中の德のない者や活力のない者を此味なき鹽に比較された。

(五)　如何にして基督信徒はその特色を失はないやうにする事が出來

るか。(馬太、六章三三、二二章三五—四〇)

第三　光(一四節—一六節)

(一)光はどんな價値があるか。

(二)イエスの教へた八德を琢磨した人は、如何にして社會の光となるのか。

(三)上述の質問に對する答案の參考。

一　光は價値あるものである。

(イ)物を見えるやうにする。

(ロ)行く道を示し照す。

(ハ)健康を與へる、太陽の光は多くの病菌を殺す。

(ニ)喜と慰とを與へる。

(ホ)保護を與へる。デンヴー市會議では電燈の光は時として一人

の警官よりも有効だと宣言した。

二　イエスの示した德を有つ者は社會に取つて價値がある。

(イ)善と惡とを明瞭に區別する、社會的問題を啓示する。

(ロ)社會の進む道を示し照す、基督信徒は社會問題に對して實際的解決を發見せねばならぬ。

(ハ)社會を健全ならせる、啻に社會改革の計劃を提出するのみならず、また此等の計劃を遂行するに原動力となるのである。

(ニ)基督信徒の接觸する社會の各部に喜と慰とを與へる。

(ホ)保護を與へる、基督教的人格の光のおかげで、自分自身に對してもその團體に對しても、惡より遠かることが出來る。

(四)十五、十六節を研究して次の二問に答へよ。

(イ)イエスの弟子は、社會改善業事に積極的立場を取るべきか。

(ロ)基督信徒が勢力を得んと欲する目的如何。

第四 各自の問題

(一)どんな意味で、己は自分の友人の間にあつて鹽たるか。

(二)どんな意で己は自分の友人の間にあつて光たるか。

(三)己が鹽たり光たる處の源は何か。

第五課 過去に對するイエスの態度

(馬太五章一七—二〇)

十七節、われは律法(おきて)若くば預言者を廢つる爲めに來れりと意ふ勿れ、われ來つて之を廢つるに非ず成就せん爲めなり。

十八節、われ誠に爾曹に告げん、天地の盡ざる中(うち)に律法(おきて)の一點一畫も遂(とげ)つくさずして廢ることなし。

十九節、是故に人もし誡(いましめ)の至微(いとちひさ)き一つを壞り又その如く人に教へなば天國に於て至微(いとちひさ)き者と謂れん、凡そ之を行ひ且つ人々教ふる者は天國に於て大なる者と謂はるべし。

二十節、我れ爾曹に告げん、學者とパリサイの人の義しきよりも爾曹の義しきこと勝れずば必ず天國に入ることを能はじ。

第一 緒論

千九百七年の東京に開かれたる萬國基督教學生青年會大會に際し、

東洋の一代員は云つた『此數世紀間西洋各國の標語は「西へ西へ」であつた然るに東洋諸國の標語は「後へ後へ」であつた。』と。イエスは保守的一東洋國に生活した。數世紀間その國の宗教的指導者等は後をふり返つてモーゼの律法とか預言者等の教訓とかに囚はれてゐた。イエスの教はすべて彼等宗教的指導者をして、これ果して過去に對して何等かの關係があるのかと疑問を起させる程に、新しいものであつた。此疑問は屢々イエスに對して發せらるゝがイエスは十七節より二十節の間に於て之に答へる。

第二　過去の諸宗教に對するイエスの態度。

(一)イエスの時代では、舊約聖書はユダヤ國民の標準的宗教書であつた。これは「律法(おきて)」とも「律法と預言者」とも見られたのである。イエスは此書とその與へる教訓に對し如何なる態度を取つたか。(十七節)

(二)「わが來れるは成就せんため」と云ふ意味。

(イ)イエスは舊約聖書に反對したとか、または自分の民族の宗教、歴史、文學に裏切つたとかて非難された。此非難に對する彼の答はかうである、すなはち彼は先づ舊約書中のにある一時的のものを脩正し、次にこれに從ふやうに命し且つ從ふ丈けの道德的の力を衆人に與へ、以て舊約書を完成し、成就したのである。彼等ユダヤ人の有してゐた宗教を完成した。彼は舊約書中の或る細目を取のけながら、諸種の理想と主義とを實行したのである。

(ロ)若しイエスが舊約書を退けたやうに思はれるならば、それは只彼の目的は尙一層高い標準を立てるにあつたと云ふ方が正しい。彼は、舊約書中のどの要素は永久的の價値があり、どの要素は一時的のものだと宣言するやうに、神に擇ばれた者だと自ら知つてゐ

たのである。彼は一時的のものを取のけると共に、其代り一段高いものを與へたのである。こんな意味で彼は之を成就した、即ち過去の宗教的教訓を完成したのだ。

(ハ)十八、十九節の意味

(一)「一點」及び「一畫」はヘブライの文字で最も小さい記號である。私共の云ふ「丶」とか「亠」とかに當る。

(二)兩節の言葉でイエスはその弟子に完全かれと教へたのである。彼は過去の教に含まれる永久的なる大眞理はどうしても變へずにあくまでも遵奉せねばならぬと教へた。

第三　其時代の宗教的指導者に對するイエスの態度。(二十節)

イエスはその弟子等に告げた。行に於ては當時の學者に勝れ、過去の教訓に含まるゝ永久的眞理にはあくまで忠誠であり、而して全心全靈

を盡して品性の爲めに闘はねばならぬと。

第四　トルストイの馬太五章一七―二〇の解釋。『我が宗教』五〇―六八頁)

トルストイによれば、イエスは「律法」を二つの異つた意味に使つた。イエスが「爾曹の律法」(約翰八章一七)とか或は「律法と預言者」(馬太七章一二)と言つた時には、それは舊約書のモーゼの律法に關したものである。馬太五章一七には「律法若くば預言」と言表され、同じく一八節には「律法」とある。此等の場合に於ては、イエスはモーゼの成文律法に就て言つて居るのでなくして、神の永遠なる律法に就て言つてをるのである。これは人の手になつた如何なる成文律にも勝つたものである。イエスは舊約書の成文律の細目を捨て、其代りに自ら口で教へ、行で示した處の永遠なる神の律法を打樹てたのである。イエスの話を聽いた者は、その「律

法」と云ふことに此等二つの意味のあることを明確に了解したのだとトルストイは思つてゐる。トルストイは路加傳十六章十六、—十七節を引く『律法と預言者はヨハネまでなり、其のち神の國は宣傳へらる、皆用(つと)力(め)て之に入らんとす。天地の廢るは律法の一畫の廢るよりも易し』。此等の節によつて見れば、第一の『律法』は明らかに、すでに廢つた成文律に關したものである。世界の滅びざる限りは決して廢らぬところの第二の『律法』は永遠に變らざる神の律法である。

第五 過去の日本及び現在の日本に對するイエスの使命。

日本に於けるイエスの使者は、古來の宗教及び古來の國民生活の內にある、善きもの永久的なものを打壞さうとはしない。イエスの使者は一層高き道德的標準を建てんとし永久的で普遍的なものを以て一時的な地方的なものに代へんとする。而して正義なりと認められたもの

を實施するやうな道德的威力を與へんとするのである。基督信徒は如何に基督が、諸國民間に宗教的倫理的理想を統一し、完成し、且つ建設するかを示さねばならぬ。

第六課　神國の五個の新道德標準

ヴォトーは云ふ『イエスは昔の天啓を單純に保守するものではなく、却つて宗教及び倫理界に於ける新しい主權者であり、神より新しく啓示を受けた者である。イエスは舊いものを破壞すると云ふ攻擊を受けたが、併し彼れ自ら云ふやうに、それと正反對に彼は舊道德法典の中にある處の永遠に朽ちないものを受容れ、以て是れに積極的の改善を加へたのである。彼は今や舊道德に靈敏なる改善を加へ憤怒、貞操、正直、復讐、愛と云ふ五大社會問題に關し、新しき道德的標準を宣言したのである。』

（馬太五章二一――四八）

第一　虐殺、憤怒、和解につき（馬太五章二一――二六）

二十一節、古への人に告げて殺すこと勿れ、殺す者は審判に干からん

と言へること有るは爾曹が聞きし所なり。

二十二節、されど我れなんぢらに告げん、凡て故なくして其兄弟を怒るものは審判に干からん、又その兄弟を愚者よといふ者は集議に干からん、又狂妄よといふ者は地獄の火に干かるべし。

二十三節、是の故に爾曹もし禮物を携へて壇に往きたる時、かしこにて兄弟に恨まるゝことあるを憶起さば、

二十四節、その禮物を壇の上におき、まづ往きて爾の兄弟と和ぎ、後きたりて爾の禮物を獻げよ。

二十五節、爾を訟ふる者と倡に途間にある時はやく和げよ、恐らくは訟ふる者なんぢを審官に付し、審官また爾を下吏に付して遂に爾は獄に入れられん。

二十六節、我れまことに爾に告げん、分釐までも償はされば必ず其所を出ることを能はざる也。

（一）「二十一節に古への人に告げて」とあるのは基督より千餘年前に作られた舊約書中の律法に關係したことである。此律法とは何ぞ（出埃

及記二十章十三節)。

(二)二十二節では如何なる新しき道德標準をイエスは建てたか。

(三)上述の問題の答案の參考

(イ)憤怒とは、復讐的衝動を伴なふ發作的な不快の感情である。これは過激に陷り易く、大抵は自制力を失ふのである。(センチュリー辭典)

「愚者」とは「からッぽな奴」と云ふことで、輕蔑の言方である。「狂妄」とは尙ほ一層强い言方である。

(ロ)ユダヤ國では「審判」とは普通裁判所に關することで、「集議」は高等法院に關するものである。「地獄の火」とはエルサレムに近いゲヘナの谷に關したことで、この谷はエレサレムから放逐された者を焚いた處である。これは死後の刑罰の場所に喩へられるやうになつた。

(ハ)「審判」「集議」及び「地獄の火」はすべて、道德生活、精神生活に於ける怒

の恐ろしい結果を說明する處の比喩的な言表してある。

(ニ)イエスの標準に從へば憤怒は虐殺同等に審判を受けるものである。イエスが心の罪にかくの如く重きをおいた譯は、德性も品行も全く心意の狀態に基くものであることを明瞭に見たからである。

(ホ)我等の主は思想感情で犯す罪も、あからさまな行爲に現はれるものと同じく寬容しないのである。而して言葉の上の罪は一層重いものとする、また憎惡をたくらむことは、人の靈を殺すところの罪惡であると見たのである。(ゴーア)

(四)第一の新道德標準の第一の實際的應用。

一、二十三節及二十四節に於てイエスの敎へたことは、人の宗敎的禮拜に列するを得るに先つて缺くべからざる要件である。

二、イエスの眞意味を了解するための參考

(イ)私等は、己が神に近かんとするのを碍けるものがあれば、何てあらうと速かに避けねばならぬ。

(ロ)己の心中には仲間に對して悪意を有つてゐながら形式的に祈つた處がその法は無効である。

(ハ)友愛を捨てるよりは神を禮拜する事を止した方が勝つてゐる。

(アポット)

(ニ)誰れが悪を爲したかてふ問題は起らない。禮拜する前に人と和解するやうに眞摯に努力せねばならぬ。

(五)新道德標準の第二の實際的應用

(イ)二十五節二十六節に於てイエスはその弟子に對し、如何に訴訟を處置せよと命じたか。

(ロ)以上の二句は、神の教を乞ひ、神を正當に禮拜するためには人に

對する如何なる悪意をも之を除去せねばならぬといふ樣に解することも出來る。換言すれは通常謹愼といふ事は、人の寛容の精神を起さしむるに足るものでなければならぬといふ事に解してもよいのである。

(ハ)若し凡ての人々が審判に付さないと云ふ此主義に從ふとしたならば、どんな種類の損失及び苦痛を防止し得るか、

第一　貞操と離婚につきて(馬太五章二七—三二)

二十七節、古への人に告げて姦淫する勿れと言へることあるは爾曹が聞きし所なり。

二十八節、然れど我れ爾曹に告げん凡そ婦を見て色情を起す者は中心すでに姦淫したる也。

二十九節、もし右の眼なんぢを罪に陷さば抉出して之を棄てよ、蓋は五體の一つを失ふは全身を地獄に投入れらるるよりは勝れり。

三十節、もし右の手なんぢを罪に陷さば抉出して之を棄てよ、蓋は五

體の一つを失ふは全身を地獄に投入れらるよりは勝れり。
三十一節、また曰へることあり、凡そ人その妻を出さんとせば之に離
緣狀を與ふべしと。
三十二節、されど我れ爾曹に告げん姦淫の故ならで其妻を出す者は
之に姦淫をなさしむるなり。

一イエスの示した貞潔の標準

(一)二十七節に於て、イエスは如何なる舊約の律法を引用したか(出埃
及二十章十四節)
(二)二十八節に於て、イエスは如何なる新道德標準を建てたか。
(三)イエスは、思想と行爲をばいづれが惡きかといふ比較論には立ち
入らなかつた。彼は單に思想其ものが惡てあると云ふのてある。こんな
色々な教訓に照して明瞭なやうに、イエスの主なる懸念は內的生活の
正しい處の人を作るにあつた。內的生活が正しければ外的生活はおの

づから正しくなるに相違ない。

二イエスの教へた高き貞潔の標準に遵ひ生活するに當り實際的に
して而かも相異れる二方法。
(一)內的生活の貞操を保たんためイエスは如何なる二積極的行爲を
要求するか
(二)此間に對する答案の參考、
(イ)眼と手とを一緒にあげてある譯は、眼は惡い思想を惹起す源て
あり、手は之を實行する機關だからてある。
(ロ)その卑しき慾情を屈服せしむる爲めの戰鬪に於て、人を援助す
るには如何なる犧牲も惜くはないのてある。
(ハ)イエスは『何々するよりは勝れり』と云つた。肉體的に完全てあつ
て罪に居らうよりは寧ろ不具(かたわ)になつても道德てある方が勝つてを

るとはどんな意味で云ふのだらう。

(ニ)安全なる生涯は完全なる生涯に勝る(ゴーア)

(ホ)貞操は如何なる犧牲を拂つても保持せねばならぬ(ギブソン)

三 離婚

(一)離婚に關する舊約書の律法はどうてあつたか(申命記二十四章一二)。イエスの時代に於ては離婚問題が激しく論ぜられてゐた。ユダヤ人は好奇心を以てイエスの意見を聞いた。

(二)三十二節には、イエスは離婚に關し如何なる律法を作つたか。

(三)イエスの眞意味を了解するための參考、

(イ)馬可十章十一、十二、章及び路加十六章十八を見よ。此等の言葉によれば、イエスはその弟子等に如何なる事情があつても離婚し、而て再婚することはてきないと明白に命令したやうてある。

(ロ)「姦淫の故ならでは」(三十二節)と云ふ言葉は了解に苦むものてある。また馬可傳や路加傳に傳へられてをるイエスの言葉と非常に矛盾するやうに見える。それで或る聖書學者などは此等の言葉はイエスに依つて語られたのてなく、執筆者に依つて挿入されたものと思ふ位ゐてある(馬太十九章九もこれと同樣てある)。

(ハ)結婚關係に入るに相應はしき男子が、一人の妻を有ち、また婦人も一人の夫を有つに至らば此結合は如何なる口實の下にも、夫婦何れよりも破壞すべきものてはない。(トスルトイ)

(ニ)イエスの結婚の理想は甚だ高かつた。基督の弟子たるものは須く彼の標準に從はねばならぬ。併し乍ら、基督の高い理想を未だ受容れない人々に、社會の法律に依つて、此標準を制强することは却つて不利益かも知れない。

(ホ)結婚は神聖なる制度である。その目的は、男女を肉體及び精神に於て離すべからざる結合をなさしめるのである。すなはち、かくして人は相互にその足らざるを補つて一家族の基礎を置くのである(ソラック)

(ヘ)時としては、イエスの此六ヶ敷しい規則の依つて來たる生物學的理由をば、科學者が發見するかも知れない。不節制なる男女關係は最も卑むべき花柳病を生じ、道德の頽敗をかもすが如く、離婚や再婚は、科學的根據から見ても、人類の最高なる肉體の發達及び道德の發達に障碍たることは證明されるのである。

(ト)何故にイエスは離婚を禁ぜられたかに就てなほ一つの理由があげられてある。即ちイエスの生涯の大なる目的の一つは神を人々に紹介すること、神は何であるかを人々に告ぐることであつた。彼は

神を父と呼んだ。父と云ふ言葉の眞意味を識り得るは、清き家庭に育てられた者ばかりである。離婚及び再婚は、如何なる理由の爲めにもせよ、家庭の敵である。離婚や再婚は父と云ふ言葉の意味を曖昧にする。夫故にかくの如き行爲を兩親がなすときは、その小さい子供に神を了解させることが出來なくなる。

(チ)最も清き貞潔の快き生涯を送らんには、一人の處女を愛するに限る。即ち彼女を得るまでは、長き年月の間、高尚なる働をなし、彼女に附纏い、彼女を尊敬するのである。それは天か下に處女の有する清き感情に勝る精巧な指導者が無いからである。この清き感情は實に男子の內に在る劣情を抑ゆるのみならず、高き思想と、優しき詞と、禮儀と、高名心と眞理を愛するの心と、あらゆる男子の具ふべき諸德を敎ゆるものである。(テニソン「アーサー王の牧歌」)

第三　誓と正直とについて(馬太五章三三——三七)

三十三節、また古への人に告げて偽りの誓を立つること勿れ、なんぢら誓ふ所は必ず主にあるべしと言へることあるは爾曹が聞きし所なり。

三十四節、然れど我れなんぢらに告げん。更に誓ふこと勿れ、天を指して誓ふ勿れ、是れ神の座位なれば也。

三十五節、地を指して誓ふこと勿れ、これ神の足凳なれば也、エルサレムを指して誓ふこと勿れ、これ大王の京城なれば也。

三十六節、爾の首を指して誓ふ勿れ、そは一すぢの髮だに白くし黑くすること能はざれば也。爾曹たゞ是々否々といへ、此れより過ぐるは惡より出づる也。

(一)誓とは、人が神の照覽を願ふ嚴肅なる訴として捧げる陳述若くば約束の證據である。ユダヤ人の間には誓を輕んずることが屢々てあつた。

(二)三三節——舊約の律法では誓は是認されてゐる。(出埃及記二十章七、二十二章二、民數記略三十章二、申命記六章十三)

(三)誓の用ゐ方に於てイエスは如何に教へたか。(三四——三六節)

(四)イエス時代のユダヤ人はやたらに誓を用ゐた。イエスは此習慣を一掃し而して、誓をしやうがしまいがその陳述若くば約束は正直にせねばならぬと主張した。

(五)基督の弟子は妄りに斷然たる言葉を用ゐることを避けねはならぬ(アレン)

(六)如何にイエスは言葉を簡單にせよと命じたか。(三七節——)

(七)イエスはその弟子に飾のない眞實を簡單な明瞭な言葉で話すやうに命じた。正直な人には誓は全く必要がない。誓を用ゐることは匿れたる僞を含む。イエスは人々の間のあらゆる交通は絶對的に飾りない

正直であるやうに命じた。

第四　復讐、無抵抗及び奉仕について（馬太五章三八――四二）

三十八節、目にて目を償ひ齒にて齒を償へと言へることは爾曹が聞きし所なり。

三十九節、されど我れなんぢに告げん。惡に敵に敵することなかれ、人なんぢの右の頰を批たばまた他の頰をも轉らして之に向けよ。

四十節、爾を訟へて外服を取らんとする者には裏衣をも亦とらせよ。

四十一節、人なんぢに一里の公役を强ひなばこれと偕に二里ゆけ。

四十二節、爾に求むる者には與へ、借らんとする者を卻くる勿れ。

(一)三十八節に於て、イエスは復讐に關する舊律法に就て何と云つたか。（出埃及二一章二三――二五）

(二)三十九節より四十二節にかけて、無抵抗と奉仕とに就いてイエスの教訓を說明する處の動詞の表を作れ。

(三)イエスは何を意味したか。

(四)此質問の答案の參考、

(イ)四十節の「外服」はオヴーコート若くば羽織に類するもので、「裏衣」は角ばつたやうな大きい着物で、身體をたつぷりと包む處の所謂「着物」と同じものである。

(ロ)四十一節――ローマの法律では政府の役人或は兵士が官用で旅行する時には、其道筋の住民に無賃で道案內とか荷物運びをさせる。

(ハ)トルストイは其著『我が宗教』で此イエスの言葉を文字通りに解釋した。彼はかう書いてゐる、『よし自分の上に迫害や苦痛やまたは死がふり掛つて來やうと、惡に反抗することなく凡てのことを忍ばねばならぬ。決して暴力に抵抗する勿れ。決して愛の法則に反して何事もしてはならぬ。惡に敵對しないことはイエスの教理の中心點である、義務としてかう實行することは當り前である』と。これと同一の論

法でトルストイは陸海軍に依りて或は警察官に依り或は裁判所に依ってすらも、法律上の暴力を使用することは、イエスの教に背くものだと主張してをる。併しかくの如き極端なる解釋は如何に効力のないかはトルスイの死後間もなくての遺族が遺産分配に關して法庭に訴へた事實に照しても明白である。

(ニ)復讐とか返報とかの觀念に立脚し、或は常に自分の權利とか自分の威嚴とかを主張し、自分の爲めのみに働いて他人の爲めに決して働かず、或はまた出來得る限り多く得て少く與へると云ふやうな、行爲標準に則ることの如何に慘めてあるかを衆人に覺らしめんとイエスは試みたのである。(ヴォトー)

(ホ)イエスは、自分の弟子が他人より受ける損害を見逃がし、復讐心を起さないことを期待する(三九、四〇節)。彼はまた、自分の弟子等が社

會的の重荷を快く分擔することを期待する(これには重税を納めることも含まれる)。彼は、自分の弟子等がその『權利』を忘れ而して絶へず他人の爲めに奉仕する機會を捕へるに敏なることを要求する。

(ヘ)四十二節、無分別な、施こしは命ぜられてない。只自己を犧牲にするやうな慈悲心が必要である。(ゴーア)

第五　憎と愛(馬、太五章四三——四八)

四十三節、爾の隣を愛みて其敵を憾むべしと言へることあるは爾曹が聞し所なり。

四十四節、然れども我れ爾曹に告げん、爾曹の敵を愛み爾曹を詛ふ者を祝し爾曹を憎む者を善視し虐遇迫害むる者の爲めに祈禱せよ。

四十五節、かくするは天に在ます爾曹の父の子とあらん爲なり、それ天の父は其日を善者にも惡者にも照らし、雨を義しき者にも義からざる者にも降らせ給へり。

四十六節、爾曹おのれを愛する者を愛するは何の報賞かあらん、税吏

もしかせざらんや。
四十七節、安否を兄弟にのみ問ふは人より何の過ぎたることかあらん、稅吏もしかせざらんや。
四十八節、是故に天に在ます爾曹の父の完全きが如く爾曹も完全くすべし。

(一)四十三節、舊約の律法は何を敎へるとイエスは言つたか。(利未記十九章一八)

(二)「爾は爾の敵を憎むべし」と云ふのは舊約書には見えてゐない。併し此言葉は舊約時代の精神を代表するものである。ユダヤ人はすべて外國人を蔑視した。

(三)四十四節、如何なる新しき命令をイエスは與へたか

(四)四十五節、如何なる動機が人をしてその敵を愛するに至らしめるか(馬太五章五、九)

(五)四十六——四十八節、イエスが努力するやうにと命じた究竟の道德標準如何。

(六)イエスは、全人類を一つの完成なる同胞として結合せしめる處の普遍的博愛主義を打建てやうとした。(ヴォトー)

(七)此の博愛主義の中には實際的宗敎の主要部分が存するのである。(オール)

一、結　論

三十八——四十八節に於て私等は社會道德の七階程の暗示を見出す。

(一)殺人——野蠻時代に於て、或は今日惡人の間にあつては、如何なる種類の損害を受けても復讐として人を殺すのである。

(二)三十八節、賠償的復讐——舊約書に於ては、殺人を禁じて、野蠻時代の殺人御免の法律に改良を加へた。併し受けた損害と丁度同等なる賠償

的の復讐はしてよい事になつてゐた。

(三)三十九——四十節、無抵抗——イエスは尙ほ一歩を進めて如何なる種類の復讐をも禁じた。

(四)四十一——四二節、奉仕——これは各人に出來得る丈けの善を爲さんとする精神である。これ世界中にある基督敎徒が正に取らんとする社會道德である。

(五)四十四節、愛——私等が先天的に嫌ふ處の人々を愛するには神の助がなくては出來ない。

(六)四十四節、祈禱——愛に勵まされて敵の爲めに祈ることは基督信徒の高い品性の現れである。

(七)四十八節、完全——父なる神の如くならん爲の努力。

二、著者は米國に一年の滯在後、近頃日本に歸つてきた。著者の感じたこ

とは、此兩國の基督信徒が殆んど(四)の階程まで進んで來た事實である。『社會奉仕』と云ふ言葉は到る處にきかれる。基督信徒の進まねばならぬ階程は尙ほ三段殘つてゐる、或る人々はすでに(五)(六)或は(七)の階程まで踏み込んでゐるが、併し敎會員の大部分はまだ(四)の階程から一歩も出てゐない。

三、他人に對して諸君は如何なる心的態度を取つてゐるか。

四、神國の五個の新道德標準を復習せよ、而してどれが最も諸君を利したかまた何故かを判別せよ。

第七課　神國民の動機（馬太六章）

『慘憺たる生活の原因は動機の缺乏にあり』（ジョーヂ、エリオット）

第一　緒論

第一節、なんぢら人に見せん爲ゆに其義しきを人の前に行すことを慎め、もし然らずは天に在ます爾曹の父より報賞を得じ。

第六章の主要點は、神國民たる者の正義は神を望むことである。基督信徒をして行爲をなさしめ且つ選擇せしめる處のその動機は、神の是認する所に從ふに在り。正義を試驗するものは神の考である。多數の宗教學者道德學者は高い標準を打建てるけれども、力强き原動力を與へる、ことに失敗する。イエスはそんな失敗はしなかつた。彼は自分の弟子たる者が努めて獲得すべき、四ケの個人道德と、四ケの社會道德（第二課

第三課）とを宣言した揚句、五ケの新道德標準を打建てた揚句（第六課）今や彼は人をして己の教へたことを實行し得せしめるやう、十分に力强い動機を宣言するのである。イエスは三つの例をあげて此原動力を說明する。

第一　慈善事業の動機（馬太六其二―四）

二節、是故に施濟をなすとき人の榮を得ん爲めに、會堂や街衢にて僞善者の如く鐘を己が前に吹かしむる勿れ我まことに爾曹に告げん彼等は既にその報賞を得たり。

三節、爾曹施濟をなすとき右の手の爲すことを左の手に知らする勿れ。

四節、かくするは其施濟の隱れんが爲めなり、されば隱れたるに鑒たまふ爾曹の父は明顯に報ひ給ふべし。

（一）二―四節の註釋

(イ)二節にある筬とは最初は食物とか金錢とかを施こす爲めに乞食を呼集めるに用ゐたものであるが、後には施す人の廣告の手段として用ゐられるやうになつた。

(ロ)僞善者の得る報賞は神に是認されたものでない。只其慈善を人目に立てるものである。これ僞善者の受ける一切の報賞である。

(ハ)三節は實にすぐれた言ひ方である、慈善の爲めに與へる時は、諸君は只諸君が扶けんとしてゐる、その對象の事をのみ思ふて、人が何と言はうが、或は其施物のために如何な德があらうが、そんな事を思つては可けない。

(二)四節、すべての善行の背後にある大動機は如何なるものであるべきか。

(三)イエスの眞意を了解するための參考。

(一)慈善行爲の隱れたる樂は大偉人の賄賂である(ドライデン)

(二)慈善事業に於ける私等の動機を試驗する方法としては次の如く問うて見るがよい。人々が視てをる時は一層澤山の義捐金を寄附するか、私等の動機は名前を印刷したい爲か、私等は他の人々が視てをるから子供や、負傷者や子供を抱いた母親に對して親切にふるまうのか、若くはその根本動機は神を喜ばせ神の如くふるまはんと云ふ願ひにあるのか。

第二　宗教的禮拜の動機(馬太六章五、六、一六—一八)

五節、なんぢ祈る時に僞善者の如くする勿れ、彼等は人に見られんがために會堂や街衢の隅に立ちて祈ることを好む、われ誠に爾曹に告げん彼等は既にその報賞を得たり。

六節、なんぢ祈る時は隱密なる室に入り、戸を閉ぢて隱微たるに在ます爾の父に祈れ、さらば隱れたるに曁たまふ爾の父は明顯に報ひ給

ふべし。

十六節、爾曹斷食をするとき僞善者の如く憂容をする勿れ、彼者は斷食を人に見せん爲めに顏色を損なふ、我れまことに爾曹に告げん彼等は既にその報賞を得たり。

十七節なんぢ斷食する時は首に膏をぬり面を洗へ、

十八節、かくするは爾の斷食人に見えずして隱微たるに在ます爾の父に現れんが爲めなり、されば隱微たるに鑒給ふ爾の父は明顯に報ひ給ふべし。

(甲) 祈禱

(一) 五節に於て、僞善者の好む祈禱の方法如何。

(二) 僞善者の受ける報賞如何。

(三) 六節に於てイエスはその弟子に如何に祈れと云ふか。

(四) 此二つの祈の方法の背後にある動機如何、

(五) 五節及六節の註解。

(イ) 僞善者と云ふ希臘語の原意は俳優である、即ち實際自分がさうでないのをさうであるやうに裝ふことである。

(ロ) ユダヤ人は十八のお極り文句の祈禱を有つてゐて此等を毎日繰り返し〳〵祈つた。ユダヤのラビ(教師)は一つの祈り場所で三時間ぶつ通しに祈るなどは屢々(しばし〳〵)やることであつた。

(ハ) 今日と雖も基督信徒の中には人に聞かせん爲めに祈る者は少くない、かくの如き祈は神に取つては何等の効果もない。最も効力のある祈は人が只神と二人きりある時である。

(ニ) 祈る時、記憶すべきことは祈禱の目的は先づ第一に神と交はると云ふ事である。是が大動機であらねばならぬ。

「われはこの物騷がしき世を遁るゝ要なし、

たゞ日々の務のおはりし後

わが掌を合せてひそかに祈る
かたく閉ざせる隠微なる室にて。

われには眼に見えぬ俗世を離れたる室あり、
そは天の如く日の如く美はし、
わが足は群衆の中に立てども
わが靈はこの室に遁れて祈る。

また如何にしてもその水晶の如き壁を通しては
俗世のどよめきはその音を徹す能はず
また如何なることあるも人の耳は
わがさゝやく靈の言葉を聞く能はず。

如何に耳傾くる人なりとも、知る能はず
いつわがその室の閾をこへしかを、
そは、わが祈を聞く彼のみ只一人
その扉を閉ざす音響を聞くなり。』

(乙) 斷食

(一) 十六節にある、僞善者の採る斷食の方法如何。
(二) 僞善者の受ける報賞如何。
(三) 十七節及十八節に於て、イエスは如何に斷食せよとその弟子に命ずるか。
(四) それら二つの斷食方法の背後にある動機如何。
(五) 十六、十七節の註解。
(イ) 善良なユダイ人は一週に二度(路加十八章一一、一二)と年に一度贖

罪の日(使徒行傳二十七章九、利未記十六章二九——三一、民數記略二十九章七、以賽亞書五十八章四——八)に及び重要事件の起る度(以士喇書八章二三、以士帖四章一六、哥林多役書十一章二七)に斷食するものとされてゐた。

(ロ)「斷食」は、丁度教會に出席するとか、日曜學校に敎へるとか、家庭祈禱會を開くとか、或は宗敎的事業の爲め何かの委員として奉仕すると同樣な、一種の宗敎的儀式、奉仕と見ねばならぬ。

(ハ)人々の稱讃を得る爲に宗敎的に見えるやうにした處で、眞の滿足は得られない。神の是認を得ることこそは眞の幸福の源でもあり、正しい生活の高い動機ともなるのである。

第三　職業及び個人生活に於ける動機(馬太六章一九—三四)

十九節、蠹くひ銹くさり盜人うがちて竊む所の地に財を蓄ふることなし。

勿れ。

二十節、蠹くひ銹くさり盜人うがちて竊まざる所の天に財を蓄ふべし。

二十一節、蓋は汝等の財のあるところに心も亦あるべければなり。

二十二節、身の光は目なり、目もし瞭かならば全身も亦た明かなるべし。

二十三節、若しなんぢの目眊からば全身暗かるべし、是故に爾のうちの光もし暗からば其暗きこと如何に大ならずや。

二十四節、人は二人の主に事ふること能はず、そは此を惡み彼を愛し、此を親み彼を疎むべければ也、なんぢら神と財に兼れ事ふること能はず。

二十五節、是故に我れなんぢらに告げん、生命の爲めに何を食ひ何を飲みまた身體の爲めに何を着んと憂慮らうこと勿れ、生命は糧よりも優り身體は衣よりも優れるにあらずや。

二十六節、なんぢら空の鳥を見よ、稼くことなく穫ることなせず倉に蓄ふることなし、然るに爾曹の天の父は之を養ひ給へり、爾曹之より

も大に勝さる者ならずや。

二十七節、爾曹のうち誰か能く思ひ煩ひて其生命を寸陰も延べ得んや(或は其身の長を一キュビットも延べ得んや)。

二十八節、また何故に衣のことを思ひ煩ふや、野の百合花は如何にして長つかを思へ、勞めず紡がざる也。

二十九節、われ爾曹に告げんソロモンの榮華の極みの時だにもその裝この花の一つに及ばざりき。

三十節、神は、今日野にありて明日爐に投入れられるゝ草をも如此そはせ給へば況して爾曹をや、嗚呼信仰うすき者よ。

三十一節、然らば何を食ひ何を飲み何を衣んとて思ひ煩らふ勿れ。

三十二節、これ皆な異邦人の求むるものなり、爾曹の天の父は凡て此等のものゝなくてならぬことを知り給へり。

三十三節、爾曹先づ神の國と其義しきとを求めよ、然らば此等のものは皆なんぢらに加へらるべし。

三十四節、是故に明日のことを思煩ふこと勿れ、明日は明日の事を思ひ煩らへ、一日の苦勞は一日にて足れり。

緒論

十九節より三十四節までには、イエスの弟子たる者が物質界に對して取るべき態度を說き、職業及び個人生活に於ける信徒の動機はかくあるべしと解いてある。此條目の鍵は三十三節である。此節を熟讀してこれはどんな意味であるかを注意せよ。

第一 信者が此世に處する法(一九—二一節)

(一)十九—二十一節に於ては、此世の財寶を蓄へることに反對した三つの理由が擧げてある。

(二)二十節の意味する處は、諸君が善良なる慈善事業に依り、他人の爲めの精神的事業に依り、また自己の精神生活を磨き上げることに依つて、神と取引を增せと云ふにある。

(三)十九節と二十一節に於ては、イエスは財を增すことを悉く詛うた

のではない。彼の詛うたのは、只財寶其れ自らの爲めに若くば利己的な目的の爲めに蓄財することである。物質的の物は皆人生の高き精神的の方面を發達せしめる助として使用し、且つ「心情」すなはち主要なる趣味は物質界に有たんで、神のことにのみ有たねばならぬと敎へたのである。

(四)富の爲めに死なんよりは、富んで生きる方が勝れてをる(ボスウェルのジョンソン傳)

第二　基督信徒の現世觀(二二節、二三節)

(一)二十二及び二十三節に於て二た心を有つ愚かさを示す爲めにイエスは如何なる例をあげたか。

(二)此の節は、肉體を明かに見る處の肉眼のあると共に、人格を照して之を明かにする靈眼のあることを意味したものである。眼が眊んでゐ

るとか、または悪い眼を有つてゐれば、その見るところ考へる處に誤が生ずる。自分の生涯の目ざす點が分裂してをるとか、不定である人は從つてその處世觀も混雜してくる、

(三)「爾の中の光」とは良心をさすのであらう。良心が不變であり信賴すべき案内者であると假定するのは、ありふれた誤謬である。良心は琢磨しなくてはならぬ、良心を神に集中せしめるやうに努力しなくてはならぬ。

(四)成功の秘訣は純一無雜の欲望である。

第三　現世に於ける基督信徒の主(二四節)

(一)財神(マムモン)は財寶を意味する通用語である。

(二)神か寶かの一つを先づ擇ばねばならぬ。そこに單一の動機があらねばならぬ故に主も單一でなくてはならぬ。

(三)金錢を有つて便利なのは金錢を使用するからである。(ベンジャミン・フランクリン)

(四)諸君の生活の主は孰れであるか。

第四　此世に於ける基督信徒の平和(二五—三四節)

(一)二十五節及び三十一節に於て、物質的のものに對し私等はどんな態度を取らねばならぬとイエスは命じたか。

(二)二十五節に於て、私等が思ひ煩ふべきでない三つのものとは何々か。

(三)物質的のものに思ひ煩ふてならぬ七つの理由。

(イ)二十五節(終り)　第一の理由は何か

(ロ)二十六節—　第二の理由は何か

(ハ)二十七節—　第三の理由は何か

注意、一キュビットとは肘から拇指の端までの前腕の長さで一フート半位ぬてある。イエスは果して思ひ煩ふ事に依つて身長を延ばし能はぬとの意味で云つたのか、生命を延ばすことは出來ないと云ふ意味で云つたのか確かには解らない。

(ニ)二十八節—三十節—第四の理由とは何か

注意(い)「百合花」と二十八節にあるのは只美しい野生の花と云ふ意味である。

(ろ)ソロモン(二十九節)はユダヤ人に取つては王の榮華の典型であつた。

(ホ)三十二節—此節に於て、思ひ煩ふ勿れと云ふ第五及び第六の理由を見出せ。

(ヘ)三十四節—第七の理由とは何か

注意、此節は私等が、不必要な杞憂をして毎日の重荷を益々重くせぬやうにとの意味である。

(四)二十五節—三十四節の注意。

(イ)平和の秘訣は思ひ煩はぬ事である。

(ロ)我等の主は用心深い先慮を禁じたるに非ずして、此世の事に小止みもなく掛念することを禁ずるのである。(ワーヅオース)

(ハ)各々の日はその日〳〵の煩悶を持ち來る。故に先の事まで思ひ煩へばこれを二重になすのみ。(デヴィド・ブラウン)

(ニ)私は老人である、それで夥しい氣苦勞をして來たが、その大部分は決して事實となつて現れなかつた。

(ホ)われは知らず、來世のいかに

不可思議なるか、驚くべきかを。

たゞ生も死も神の御慈悲により

支配めらるればわれは安けし。

われは知らず機櫂の葉の空にそびゆる

神の島とはいづこなるかを。

たゞわれは知る神の愛の御手より

さまよい離るゝことなきを。(ホイッティア)

(五)爾曹まづ神の國と其義しきとを求めよ、さらば此等のものは皆なんぢらに加へらるべし(三三)、此節を讀み暗記し而して深慮せよ。

(六)此節の意味は、若しその第一の志望が精神生活を發達せしめ、神の國を人の間に擴めるにあるならば、その人は物質的のものに就て思ひ煩ふことは全く不必要になるだらうと云ふにある。(馬可十章二九、三〇)

(七)若し人が若い時分から萬事に先立つて、まづ精神生活を發達せしめ神に從順ならうと決心し而して之に從つて行くならば、その人の生

涯は安樂にして平安である。併し乍ら若しその學校生活に於て、職業に於て、結婚に於て、家庭に於て、或は其他あらゆる習慣に於て多年の間只自分のことのみを思つてゐるならば、その生活動機をすつかり變へることは困難である。平和を得、品性を築かんとせば先づ第一に神を得ねばならぬ。

(八)生亦我所欲也。義亦我所欲也。二者不可得兼。舍生而取義者也。(孟子)

第五 注意(特別研究をせんとする人の爲めに)

『イエスの倫理』の第七章中にキング博士は山上の垂訓に於ける四大動機を摘出してをる。

(一)神は愛の父であると云ふ確信(馬太五章九、四八、同六章一)

(二)萬人は兄弟にして神の子供等であると云ふ確信(馬太五章一八、一

九、二二、二八、二九、三〇)

(三)生命は統一的のものであるといふこと、即ち生命の各部には一致なるものゝ存せねばならぬといふ確信(馬太、五章一八、一九、二二、二八、二九、三〇)

(四)道德的律法にはあくまで從はねばならぬと云ふ確信、義務を行ふことに於ては命懸けの勇猛心がなくてはならぬ(馬太五章一七—二〇、四八、同七章一四、二一、二四)併し此四つの動機は愛の父なる神に從ふと云ふ一つの動機に約めることが出來る。

第八課　神國民に對する警告（馬太七章）

緒論、五章及び六章に於て、イエスは、道德及び其弟子たる者の動機に關して徹底的なる教訓を與へてをる。第七章には彼はその弟子を四つの點に於て警告する。

第一　第一の警告――他の人々を審くこと（馬太七章）

一節、人の罪を定むること勿れ、恐らくは爾曹も罪に定められん。

二節、爾曹が人の罪を定むる如く己が罪をも定められるべし、爾曹が己を量る如く己も量らるべし。

三節、なんぢ兄弟の目にある物屑を視て、己が目にある梁木を知らざるは何ぞや。

四節、己の目に梁木あるにいかで兄弟に對ひて爾が目の物屑を我れに取らせよと曰ふことを得んや。

五節、僞善者は先づおのれの目より梁木をとれ、然らば兄弟の目より

物屑を取り得るやう明かに見るべし。

(一)一節の最初の二語は何ぞ

(二)「罪を定む」と云ふ意味如何

(三)一節と二節。何故にイエスはその弟子に他の人を審く勿れと警告したか。

(四)三―五節に於て、イエスは自分の意味を明瞭にせん爲め如何なる例を用ゐたか。

(五)一―五の解釋

(イ)イエスが禁じた審判と云ふのは、他人に對し兄弟のやうな愛より出て來ないところの批評であり非難である。

(ロ)「物屑」(三節)は檜若くはほこりの一片である。梁木(三節)は太い丸太であるイエスは當時流行の譬に關係せしめたかも知れぬ。

(ハ)イエスの弟子たるものは自分の過には峻嚴に持し、兄弟の過に對して寛大であらねばならぬ。

第二、第二の警告—靈的財寶の使用(馬太七章六)

六節、犬に聖き物を與ふる勿れ、また豚の前に爾曹の眞珠を投與ふる勿れ、恐らくは足にて之を踐み、ふり返りて爾曹を噬破らん。

(一)六節を讀み而してイエスの意味が解き得るかを見よ。

(二)六節の解釋、

(一)聖き物」とは神前に供へる犧牲の肉の意味である。その肉の一部は祭司が食用とした。

(二)ユダヤ人の皮には犬は決して手飼ひの獸ではなかつた。犬は半野生的で飼主がなかつた。犬と豚は舊約書中には汚れた卑しいものの普通の象徴であつた。

(三)若し眞珠を豚に投げてもするならば、小麥か大麥のつぶだと思つて之を食はうとするに違ひない。食はうとして食へないので、欺かれたことを知り、食物にのみ熱心な豚だから此眞珠を與へた者に怒つて來るであらう。

(四)或る種の人間は餘りに物質的のものに夢中だから、聖なる神の眞理を語る處の基督信徒を只嘲笑するであらう。と云ふ意味でイエスは云つたのである。イエスは內的精神生活の深く豊かなる經驗は聖き財寶のやうに擁護し而して同情のある人にのみ告ぐべきものであると其弟子を警告された。

第三、第三の警告——狹き門と廣き門(馬太七章一三、一四)

十三節、狹き門より入れよ沈倫に至る路は闊くその門は大なり、これより入る者多し。

十四節、命に至る路は窄くその門は小さなり、其路を得るもの少なり

(一)、十三節、十四節を讀みてイエスの眞意を發見せんと試みよ。

(二)、十三節、十四節の解釋

(イ)バレステナの市は支那の町のやうに、門のある壁で圍まれてゐる。それで市に入るに門を通らねばならぬ。

(ロ)イエスの組合に入るには即ち、彼の弟子となるには、人は邪魔になるものを振落して服從、克己、犧牲の生活を送らねばならぬ。

(ハ)ウイリアム・ゼームスは自己の學生にその意志を強くせしめん爲めに毎日困難なる仕事をするやうに常に忠告した。

(ニ)凡そ何事によらず、之に達するの道は、決して坦々たる大道にあらず。又一時に一事をなせ而して續いて萬事を成就せよ。速かに生長するものは、亦速かに萎む、生長の遲々たるものは、其生命も長し、(ジェ、

ジ・ホランド)

(ホ)十四節にある「命」と云ふ、言葉は約翰傳に於て屢々用ゐられてゐる。併し馬太傳は餘り使つてない。これは充實した强き品性と、廣大な感化力と、深い幸福の謂にして神の意志を爲すもの丶みが享有し得るものである。

第四　第四の警告—僞りの牧師(馬太七章一五—二三)

十五節、僞りの預言者を謹めよ、彼等は綿羊の姿にて爾曹に來れども內は殘狼なり。

十六節、これ其果によりて知るべし、誰か荊棘より葡萄をとり蒺藜より無花果を採ることなせん。

十七節、凡て善き樹は善き實を結び惡き樹は惡き實を結べり。

十八節、善樹は惡實を結ばず、惡樹は善果を結ぶこと能はざる也。

十九節、凡そ善果を結ばざる樹は斫られて火に投入れらる。

二十節、是故に其實によりて之を知るべし。

二十一節、我を召て主よ主よと曰ふもの盡く天國に入るに非ず、唯これに入る者は我が天に在ます父の旨に遵ふ者のみ也。

二十二節、其日われに語りて主よ主よ主の名に託りて敎へ主の名に託りて鬼をおひ主の名に託りて多く異なる能を行ししに非ずやと云ふもの多からん。

二十三節、其時かれらに告げて、われ嘗つて爾曹を知らず惡をなす者よ我を離れ去れと曰はん。

(一)、十五節に於ける、イエスの第四の警告如何。

(二)、十五節に於てイエスは僞りの敎師を何に比したか。

(三)、十六—二十節に於て、僞りの敎師は如何して見分けられるか。

(四)、二十節—眞の敎師がその生活に於て示すべきところの善果とはどんなものか。

(五)、二十一節—基督の弟子となる條件如何。

(六)二十二—二十三節に於て、イエスは自分が人々を報賞或は刑罰する未來の審判の日を說いてをる宗敎上の敎師及び働き人等に適用さるべき試金石は何ぞ。

(七)一五—二十三節の解釋。

(イ)如何なる人も、その敎へる處のものを、自己の個人的生活に於て表現しないならば、道德上宗敎上の敎師とは云はれない。(ヴォトー)

(ロ)イエスは品性に重をおいた。信條にではない、愛と慈悲と平和と貞潔と同情と援助とは、イエスがその弟子たる者に發達せしめんとした特性であつた。

(ハ)敬虔であると云ふ評判を得やうとする多くの人々は、後になると利己的で空虛なる僞善であつたことを露はして了ふ。

(ニ)品性は捕ふべきであつて敎ふべきでない。(キング博士)

第五 結論

一、イエスの與へた四つの警告とは何ぞ。

二、其等の警告を青年に對する價値の輕重順に擧示せよ。

三、諸君はいづれの警告を最も必要とするか。

四、若しイエスが今日の日本に居たとしたなら、青年に對して他にどんな訓戒を與へたらうと諸君は思ふか。

第九課 祈禱（馬太六章七—十五、同七章七—十一）

六章七節、爾曹祈るときは異邦人の如く重複語を言ふ勿れ、彼等は言葉多きを以て聽かれんと意へり。

八節、是故に彼等に倣ふこと勿れ、爾曹の父は求めざる先に其需用物を知り給へばなり。

九節、然らば爾曹かく祈るべし、天に在します我儕の父よ願くば爾名を尊崇させ給へ。

十節、爾國を臨らせ給へ、爾旨の天になることく地にもならせ給へ。

十一節、我儕の日用の糧を今日も與へ給へ。

十二節、我儕に罪を犯す者を我がゆるす如く我儕の罪をも免し給へ。

十三節、我儕を試探に遇せず惡より拯ひ出し給へ、國と權と榮は爾の窮なく有ち給ふ所なり、アーメン。

十四節、爾曹もし人の罪を免さば天に在します爾曹の父も亦なんぢらを免し給はん。

十五節、然れどもし人の罪を免さずば爾曹の父も爾曹の罪を免し給はざるべし。

緒論

イエスは其弟子達に祈るところの動機は、神を喜ばせ神の祝福を得んとの願でなくてはならぬと教へたのである(第七課)。今や彼は祈禱の模範を示すのである。

第一 かく祈る勿れ(七節、八節)

(一)七節のイエスは如何なる警告を與へたか。

(二)「異邦人の爲す如く」―奈良の或る神社の境内を一人の男が御利益を得ると思つて、跳足で走りながら百度を踏んでゐた。汽車の内で數人の僧侶達が何時間も何時間もお念佛を唱へてゐた。そんな祈は只譯もなしに『ナムアミダブ……』とくり返すので、丁度水車に結付けて水の力で廻轉するやうなものだこれ何故か。その答案は七節にある。

(三)祈禱は長さにては量られず、深さに依つて量らる。(ゴーア)

(四)八節にある、異邦人を眞似てはならぬと云ふ理由は何ぞ。

(五)神が若し私等の必要とするものを皆知つてをるとすれば、全體何故祈るだらうと云ふ疑問が起るかも知れぬ。

(イ)イエスは此問題は論じなかつた。併し自己の實例によつて(馬太十四章二十三同二十六章三十六、路加五章十六、同九章十八)及び自己の言葉に依つてイエスは明かに祈禱の重要なことを敎へた。

(ロ)基督信徒の祈は神に告ける爲めてはない。神が私等に祈禱を要求し給ふ一つの理由は、私等が神の自覺的に交際する習慣を作るやうになり得る爲めである。私等は其如何なる理由なるかを了解しやうがしまいが、神の賜物は只之を求むる者にのみ與へられると云ふことを信じなくてはならぬ(路加十一章九―十三、約翰十六章二十四)。

(ハ)「此世界が夢にだも見ざること〳〵は祈りによりて成就されあり」(テニスン)

(ニ)神の御旨に於ては、祈禱の念は作話ではない、よし人間はさうだと思ふかも知れぬが。(アウステン、フェルプス)

第二　いかに祈るべきか(九―十五節)

一、「主の祈」の緒論。

「かくの如く」と云はれたイエスの意味は、自分の將になさんとする祈禱は模範的祈禱だと云ふ事である。あらゆる祈禱は其精神に於ては此主の祈に似てゐなければならぬ。假令、其言葉に於ては必ずしもさうではないとしても。

二、「主の祈」の最初の言葉(九節)

(一)、此祈の最初の言葉は何か。

(二)「我等の父」―神と祈る者との關係如何。

(三)「我等の」と云ふ言葉は、神に祈るときにはイエスも私も共通の立場にあり、全世界の基督信徒は一人の父の前に只弟姉妹であることを暗示するのである。

(四)聖書若くは聖書の感化によつて作られた文學以外の文學中には父と子との關係を以て神人の關係の最上の象徴と說いた眞理は何處にも見出すことは出來ない。(アボット)

(五)人間に對する基督の最高使命は「神は爾曹の父なり」といふことにある(ドクトル、ブランシス)

(六)「天にまします」とはユダヤ人のありふれた言表であつて、イエスの含ませんと望んだ觀念を暗示する言葉である。これらの言葉は神が人類を支配する絶對性、神の偉大なること、神の至上の權力完全な

る品格、及び當然有つべき尊嚴と云つたやうなものを含有する。此れ等の思想は「父」と云ふ思想と結合して祈る者の心中になければならぬ。

三第一の祈願(九節)

(一)第一の祈願とは何ぞ。

(二)「名」と云ふ言葉には神に就て私の祈る一切が約述されてゐる。爾名を尊崇させ給へ」と云ふ祈は神を尊はんとする欲求を表す。神は宗教家に依り、教育家により、商工業家、官吏、富者、貧者、學者、勞働者などあらゆる人々に依りて認識され尊崇されんことを私は祈るのである。

(三)「尊崇る」とはおごそかなる榮を歸することである。神の名を尊崇むるとは神を永遠の昔より在ます造物主とし、聖なるものとし、造られたる一切のものは榮を彼に歸すべきであると宣言するの謂である。

る。

(四)第二の祈願(十節)

(イ)第二の祈願とは何ぞ

(ロ)「爾國を來らせ給へ」と云ふ言葉はユヤダ人がその國家が建設され偉大ならんことを希ふ希望を言表したものである。今もすべて愛國的なる國民はその國家の偉大ならんことを望む。併しイエスはユダヤ人の狹隘な希望を取つた。今日ならば彼は日本人、支那人、英國人、米國人の狹隘な愛國主義を取り之を以て普遍的な希望を作つたのであらう。イエスに取つては神の國は高い個人的社會的善であつた、これは全心を盡してイエスに從はんとするものには、如何なる國の如何なる人にも實現されることである。イエスは日本の愛國者でもなく英國のそれでもなかつた。彼は世界の愛國者であつたのである。

(ハ)それ故に我等の祈は、神が人類の中に正義と慈愛と平和とを遠かに發達せしめ給はんことでなければならぬ。福音の教義は個人の間社會の間に勢力を得、而して人道は神の聖なる理想をその子供等に示現した處の基督の如きものに變化せん事でなくてはならぬ。(ヴォトー)

(ニ)此世界に起る一切のことは永遠より永遠に亘る神の大なる計劃の實現である。(ピーチャー)

(五)第三の祈願(十節)

(イ)第三の祈願とは何ぞ

(ロ)「御旨(みこころ)を成らせ給へ」との祈は世界を益々神意に適するものと成さんが爲めに全人類が勇敢に協力するの謂である。(ゴーア)

(ハ)「天に成るごとく地にも」と云ふ祈は此物質的な世界に靈界の理

想が實行されんことである。

(ニ)以上三つの祈願の各に「天になる如く地にも」といふ一節を附加へて繰返し讀んでみよ。

(ホ)本當に自己は此祈に應答があると期待して居るかどうか。

(六)第四の祈願(十一節)

(イ)第四の祈願とは何ぞ。

(ロ)「糧(かて)」にはすべて肉體の養ひになる主要物を含んでゐる。

(ハ)「日用の糧」とは今日中必要なものと云ふ意味、これは只一の場合のためになす格段なる請願である、而して毎日此祈を繰返すやうにつてゐる。

(ニ)此第四の祈願の意味は、『上述の三祈願中にある種々の請願を實行することに於て神の爲め最上の働を我々が爲し能ふやう今日も

團體の糧を我等に與へ給へ』と云ふにある。この祈願は神の王國の廣大なる事業から自分自身の個人的必要物に轉じたものである。

(ホ)先づ世界を、次ぎに自己の私の必要物と云ふ順序に此祈はなつてゐる。自己の祈がありとある大陸と海の島々とを經廻つて後にこそ、自分の祈が最後の人種の最後の一人を愛容れた後にこそ、自分の祈が世界に對する神の全要求と全志望とを包んだ後にこそ、たゞその時にこそ自分は自分の爲めにパンの一片を乞求むべきである。祈の最初の半分は神の計畫(プログラム)である、その次ぎはすなはち、私が神の計畫を遂行する間に私の必用物を神が供給するのである。(ファイアンシス)

(ヘ)「我等」及び「我等の」とあるは祈を普遍的ならしめる。祈るところの人は神の子供であり、また凡ての神の子等の一兄弟なることを意味

する。若しイエスの敎が各國の大多數の人々に依つて遵奉さるゝならば、世界的平和は如何に速かに實現されるであらう。

注意——主の祈を有効ならしめる爲めに、聖書研究の指導者が一々黑板に書くか若くば、學生に一々片端から紙に記させなければならぬ。

(七)第五の祈願(十二節)

(イ)第五の祈願とは何ぞ

(ロ)十一節と十二節とにある動詞の意味にはどんな相違があるか

(ハ)「免す」とは「棄てる」若くば「放つ」の意味である。祈は私等の罪の完全なる除去である。

(ニ)此祈は過去の罪に對する悔悟の言表であり、また全く除去され度との願である。自己の生涯中の罪惡を認識しない人々には、品性の建設には殆ど進歩がない。

(ホ)此祈にはどんな條件が附隨してゐるか。

(ヘ)「我等に罪を犯す者を我等が免す如く」とは私等が自己の罪を神に免されんと願ふ前に、私等に罪を犯した等の人々を免さねばならぬとの謂である。

(ト)此祈願には三つの觀念が含まれてある、悔悟の必要、自己に對する神の愛及び他人を愛するの必要。

(八)第六の祈願(十三節)

(イ)第六の祈願とは何ぞ

(ロ)第五の祈願は過去の罪過の免除を乞ふが、第六の祈願は將來の罪過を前以て避けんとするにある。

(ハ)第一句の「我儕(われら)を試探(こころみ)に遇はせず」とは私等の防禦力が弱い故に、むごい試練にはなるべく遇せ給はぬやう神に願ふことである。第二

句の「惡より拯ひ出し給へ」と云ふのは或種の試練は必要と認めるのである。

(ニ)何人と雖も一切の試練から保護し給へと神に願ひはしない。こんな事を願ふのは丁度子供がその母親に向つて自己の一生涯中乳母車に乘せて引張り廻して下さいと願ふのと同じだ。併し人は餘りに峻嚴なる試練に遇せないやうに、また人格建設の爲め、或は地上に神の國を建てる爲めに必要なそれらの試練を通過して安全に導き出すやうに、其保護を神に賴まねばならぬ。

(九)結尾の頌歌「國と權(ちから)と榮は窮りなく爾の有(たも)ち給ふ所なりアーメン」

註、或る註解者は此結尾の言葉はイエスの言はれたものでなく後年誰かゞ增加したものだと云ふてゐる。

(イ)此結尾の言葉は如何に最初の三つの祈願のおさらひ見たやう

に思はれるかを注意せよ。

イ　爾名を崇尊させ給へ　榮と

ロ　爾國を來らせ給へ　國と

ハ　爾旨を成らせ給へ　權とは爾のもの也。

(ロ)「アーメン」これは、確實と眞實とを意味するヘブライ語である。これは祈禱とか信仰告白のやうな嚴肅な陳述の後にはお極りの文句として用ゐられた、而して『しかあれ』『そは眞なり』と云ふ意味を有つのである。

(十)引用文數種

(イ)主の祈は、最も簡潔に最も質實に最も感銘的に言表されたる、神及び人間の義務の根本觀念を含有する。(ヴォトー)

(ロ)福音書中福音の何たるかを最も的確に語る處のものは主の祈

を措いて外には無いのである。……主の祈によつて、福音は人生の全部に適用して神を父とすることであり、神の意志神の國と精神的に結合することであり、而してまた窮りなき祝福を享有して惡より逃れると云ふ喜ばしき保證であると知られるのである。(ハルナック)

(三)此等の祈は父なる神の從者等に依つてのみ正直に祈られる。これは基督信徒の大家檢の祈である。(ゴーア)

(四)私の改信前には、他の人々の前で祈るときは彼等に向つて祈つた。私が只獨り祈るときは自分自身に向つて祈つた。併し乍ら今は神に向つて祈る(フェルプス著「靜なる時」の引用文より)

(五)祈るやう學ばんとする者は海に行け(ジョーヂ、バーバート)

(六)爾曹もし我れに居り、また我が云ひし言なんぢらに居らば、凡て欲ふところ求めに從ひて予へらるべし約翰傳(十五の七)

第三　祈に對する應答（馬太七章七―十一）

七節、求めよ然らば與へられ、尋れよ然らばあひ、門を叩けよ然らば開かるゝことを得ん。

八節、そはすべて求むる者は得、尋ぬる者はあひ、門を叩く者は開かるゝ

九節、爾曹のうち誰かその子パンを求めんに石を與へんや。

十節、また魚を求めんに蛇を與へんや。

十一節、然らば汝等惡しき者ながら、善き賜を其子に與ふるを知る。まして天にいます爾曹の父はそれよりも如何に優れたる善物を求むる者に與へざらんや。

(一)七節に於てイエスの與へし三つの命令とは何ぞ

(二)七、八節に於てイエスのなせし三つの約束とは何ぞ。

(三)イエスはその約束を明瞭にする爲め、九、十節にて如何なる例を示したか。

(四)十一節の「如何に優れたるものを」と云ふ言葉の眞義如何。

(五)これらの五節は祈りに對する應答に就き何を敎へるか。

(六)引用文數種、

(イ)神に祈ることは、神が祈の聽者（きゝて）であり、また應答者であることを豫想してをる。

(ロ)祈禱は、人々を指揮する爲めに神に依つておかれたる力である、故に人々はこれに依つて動かされる（ベスト）

(ハ)寢床（ねどこ）に着き、而して祈らぬものは、一日より二夜を作る　（無名氏）

注意、祈禱の研究を尙ほ深くしやうと思ふ人々は、次の書を見らるが好い。

『靜かなる時』（フェルプス著）

『祈禱、その本質と領分』(トラムパル著)
『自然的秩序の彼方に』(ベスト著)
『祈禱に關する小話』(ゴルドン著)
『基督の祈禱の材料』(ドクトル、ゼームス・フランシス著)

第十課　人格の基礎（馬太七章十二、二十四—二十七）

十二節、是故に凡て人に爲らんと欲ふことは、爾また人にも其ごとくせよ、これ律法と預言者なる也。

二十四節、是故に凡てこの言を聽きて行ふ者を、磐の上に家を建てたる智人に譬へん。

二十五節、雨ふり大水いて風ふきて其家を撞てども倒るることなし、是れ磐を基礎と爲したれば也。

二十六節、凡て我が此言を聽きて行はざる者を、沙の上に家を建てたる愚かなる人に譬へん。

二十七節、雨ふり大水いて風ふきて其家を打てば、遂には倒れて其の傾覆大なり。

第一　金言（十二節）

(一)この節の始めの部分を記憶せよ。

(二)この十二節の終りの部分にある「律法と預言者」は舊約書を意味す

る。

(三)諸君自らの言葉で十二節の二つの部分の意味を語れ。

(四)此節を了解するための參考

(イ)汝自身の場合であらうと、人の場合であらうと、いかなる場合にも單に手段としてでなく、目的として人性を取扱ふやうな積りで行動せよ(カント)

(ロ)如何なる地位にある人にも他人を指揮する場合には、その指揮される者の人格と人權とを尊敬せねばならぬ。またその働に相當した報酬と一層高き人格を得る機會とを與へねばならぬ。而して彼等を器械や奴隷としてでなく神の子として取扱はねばならぬ。

(ハ)これと似たユダヤの人の金言があつた——

『汝の憎むところのことを他人に爲す勿れ』

『汝自ら憎むことを他人に爲す勿れ、これこそは完全なる律法であつて自餘のものは皆單にこれの補綴にすぎない』

(ニ)己所不欲勿施他人(孔子)

(ホ)他の人々の金言は皆消極的なのにイエスのだけは積極的である。

第二

磐の礎若くば沙の礎(二十四——二十七節)

(一)此四節を讀んで次の問に答へよ

(イ)磐上に家を建てたのは誰か

(ロ)その結果如何

(ハ)沙上に家を建てたのは誰か

(ニ)その結果如何

(ホ)智者の如きものは誰か

(ヘ)愚者の如きものは誰か

(ト)二十六節に於て「行ふ」と「行はざる」とは智者と愚者との岐路になる

(二)二十五節のその家を「撞つ」と二十七節の、その家を「打つ」と云ふ動詞の差異を注意せよ。磐上の家は幾度も幾度も撞たれたが倒れなかつた、沙上の家は只一打ちで倒れた。

(三)二十四節にある一言は品性の建設に關するイエスの思想を總計したものであるが、それは何と云ふ言葉か。(馬太七章二十一)

(四)言行一致は英語にでも日本語にでもある格言である。イエスは此を變へた。イエスに從へば智者(かしこきひと)はその聞くところを行つた、即ち聞行一致である。

(五)これらの言葉により、イエスは、彼の教を聽く計りでそれを直ちに自己の生活にあてはめて行はないならば全く無益であると教へられ

た。

(六)諸君は此イエスのおごそかな訓戒に從つて、イエスの教により學んだことを自己の行に於て遵奉せんとするか。

第三　數種の助言

(一)キング博士は、イエスの弟子たる者が礎として建設すべき磐に就て簡明に次の如くに云ふて居る。

『世界の中心に於ては愛が存し、而して宇宙は宗教的意志の上に在ると云ふ信仰は、熱誠にして希望に充てる道徳的生活に欠くべからざるところの大なる根抵的道德確信である。』

(二)これは汝の信仰の偉大なるにあらずして、汝が信ずる、そのものゝ偉大なるに在るのだ。汝を安全ならしめる處のものは、汝の大なる信仰に非ずして、そは汝の大なる救拯者にあるのだ。(ドクトル、フランシス)

第十一課　復習及び結論

諸君がもし此イエスの教訓より深い感銘を受けたならば、時間を割いて之を復讀し消化し而して此垂訓の偉大にして普遍的なる教理を自家の藥籠中のものたらしめよ。馬太傳の此三章を再三復讀し、最も優れた數節を暗記せよ。而して他の教から得た處の倫理的教訓とこれを比較せよ。諸君が夜、寐床に就くとき此教訓を熟考し、朝起上つて後、諸君の見出した此新しい魅力ある教を志ある人々には悉く語れ。

此垂訓を全體として摑むことは甚だ重要なことである。それ故に諸君は各課の主題及び條目を本を離れても之を書くことの出來る位ね、また其大體の綱領を暗記する位ねに熟讀されたい。

次に此垂訓の綱領の見本を記さう。

(一)神國民たる者の道德
　(イ)四ケの個人道德
　(ロ)四ケの社會道德
　(ハ)新しき道德標準
(二)神國民たる者の感化
(三)神國民たる者の過去に對する態度
(四)神國民たる者の動機
(五)その困難
(六)その原動力
(七)その基礎

尙ほこれ以上優れた綱領を作るやう力められたい。諸君は、かの大工が建築する時に材木を組合せるやうに精確に、此の教を全體として適

材を適處にあてはめるやうになるまで、各節を研究されたい。上述の綱領若くはこれに似たものを黑板に書くことは聖書研究組にとつてよい練習だらうと思ふ。それてどれなり一節若くは數節を適當な題目の下に置き、代る〳〵生徒に讀ませるがよい、

かう復習すれば僅か二三週間にして、此王の王、主の主の偉大な教訓を一生涯獲得することが出來るのである。

トーマス・アクイナスが、人はどうすれば學者になれるかと問はれた時に、かう答へた、

『一冊の本を讀むことに依つて』

大正二年七月廿九日印刷
大正二年八月一日發行

定價金貳拾錢

發行兼編輯人　東京市本郷區駒込林町百五十二番地　小松武治
印刷人　東京市神田區駿河臺鈴木町十六番地　高橋貞吉
印刷所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍

發行所　東京市神田區美土代町三丁目三番地
日本基督教青年會同盟
電話本局六百二十四番
振替貯金二〇一九六番

21150

發行所

日本基督教青年會同盟

東京市神田區淡路町二丁目三番地

印刷所

株式會社三秀舍

東京市神田區淡路町二丁目三番地

印刷人

高瀨直吉

東京市牛込區若松町十六番地

發行兼編輯人

小谷甚合

東京市本郷區湯島新花町十一番地

大正二年八月一日發行

大正二年八月廿五日印刷

定價金壹圓金二〇一五六錢

實費金壹圓六百二十四錢

終